

140Words twonovel ~LOVE&HOPE~

瑠冠



001

001

並々とカフェ・オレが注がれたマグカップに孤独を慰めてもらう帰宅後の静かな時間。夏でもホットで入れるのはいつもの癖だ。飲み干す頃には叫んだ後のような痺れた感覚だけが残る。涙は流さない。そう決めた僕の手を君の手が包む。ああ、泣かないと決めていたのに。ぎゅっと目を瞑った[#twnovel](#)

銀河が消えかかる紫色の朝焼け。星達にしばしの別れを告げる。夜とのさよならには不思議と寂しさはない。夕方に太陽と別れる時には一抹の寂しさを覚えるのに、不思議だ。ゆっくりと光満たすように現れた太陽。それは今日という日が始まるサイン。青くなり始めた空を仰いだ

。[#twnovel](#)

深海に沈み込んだような深夜ふと思い浮かんだのは君の顔。まだ見ぬはずの君の顔だ。何かを手渡して欲しいかのように僕は目をつむって神経を集中させる。人情という言葉から程遠い場所にいる僕を早く見つけて。音のない世界から連れ出して。あれは他ならぬ自己自身だったのかもしれない[#twnovel](#)

宇宙でたった一人きりで泣いているような気分。そのままにしておくのは悔しいからその気持ちを燃料にして飛べるところまで飛ぼうと思うんだ。滑落しそうでも何も心配はいらない。燃料はいつまでも尽きることがない。悲しみが尽きない君と僕は無限のエネルギーを手に入れたのさ。
。 [#twnovel](#)

寒い、と君に聞こえない程度に夜になって冷え込んだ空の下つぶやく。でも、聞こえてしまったようで。君は何も言わずに、自分の羽織っていた上着をかぶせてくれた。いたって自然なその振る舞い。オレンジのジャムをたっぷりのせたトーストが好きな君。そのギャップにくらくらした。
。 [#twnovel](#)

買い物のついでに寄るカフェ。実は本題のショッピングよりも楽しみだったりする。特に君という時には。今日は暑いからアイスにしようか。そんな相談も楽しい。そうしてお決まりのカフェオレを注文。席についた後のたわいもない話も僕にとっては宝石箱に閉じ込めたいくらい大切な時間。 [#twnovel](#)

君の水晶のような涙を見て責任を感じてしまう。泣かないでいてよ。僕が悪かったからさ。ただ僕にほんの少しだけ嬉しい出来事があって、君にも教えたくて。それで伝えたら。泣き出すものだから、君が。慌てふためく僕を見て今度は堪えきれずに笑い出す君。いつまで経っても敵わない。 [#twnovel](#)

民衆の声が強くなっている。そうニュースをみて思う。もっと賢くなり、もっと声を上げる。そうするといつにも増して虚構の世界はちっぽけに見える。最初から小さかったんだ。そして最初から民衆は偉大な存在だったんだ。気づいていなかっただけ。人は歯車の一つなんかじゃないこと。 [#twnovel](#)

何にもなくなったのに野の花は黄色の花を咲かせている。なんだよお前だけ。そう憎まれ口叩く気力も少し出てきた。ああ、知っている。俺もお前みたいに負けずに花を咲かせる事ができるんだろ？それを教えたくてわざとそうやってる。名もなき花がいつの間にか一番の友達になっていた。 [#twnovel](#)

励ますほど励まされ、いつのまにか貴方の腕の中に抱えているものより僕の腕の中で抱える物の方が多くなっている。ありったけをあげようとすれば、ありったけが返ってくる。そんな感覚がもっと当たり前のものになればいいね。そう言って笑顔見せる君の言葉が妙に心に響いて離れない。 [#twnovel](#)

避難所の屋根はいつもこうだ。目覚めと共に目に入るそれにいい加減うんざりしている。そして一度目覚めるとそれきり寝付けない。慢性的な疲れが当たり前になっていた。日中の炊き出し。ご飯が暖かいだけでありがたくて涙が出る。自問自答が続く中、味噌汁の暖かさだけは本物だった。 [#twnovel](#)

鬼のような形相を向けられても何も響かない。恐怖も感じない。そこにあるのは弱さを隠すための虚栄しかないのだから。吹けば飛ぶ。隷属させようと思うのは勝手だが君が願うように僕は君の事を見ない。冷ややかな態度で冷たい目で見ろ。そしてその冷たさはもう一人の君も持つ。 [#twnovel](#)

いま流行ってるんだってね。薄暗い中で今までの自分を見つめ直すこと。そしたらさ、なんでもかな。小さい頃の夏を思い出したんだ。扇風機だけが頼りのあの夏。今よりスイカが特別だった。そして今より甘かった。皮が分厚くて冷えてなんかいなかったのに。なんでだろ。無性に恋しいな。 [#twnovel](#)

会うための手段はただ一つ。面と向かって話すこと。その事実に一瞬うろたえたが考えている暇さえない。僕は走らなきゃならないんだ。君のために。君の声を聞くために。僕の声が届けるために。携帯もメールも繋がらない初めての経験で思い知る。最後は心で繋がるしかないという事を。 [#twnovel](#)

桜の木の下で君を待つ。こうしていると不幸とか幸福とかそんな言葉を超えて幸せだと思う。忘却という言葉が何より難しいと感じる僕でさえ。まだ風が少し冷たい。冬と春の狭間のこの空気がたまらなく好きだ。時計をちらり。予定の時間。向こうからやって来る君を僕は春と呼ぶ

。 [#twnovel](#)

雪の中で息を弾ませはしゃぐ君を見ていると、穏やかな時間がゆっくりと流れていくようだ。これを幸せっていうんだろうな、なんて柄にもない事をふと思ったりする。もうすぐ春だ。雪の中で体全体を使って喜ぶ君は、もう見られない。これからは桜舞い散る中で笑顔輝く君の季節だから。 [#twnovel](#)

涙の邂逅がいくつ生まれた事だろう。いつもの顔なじみを目にするだけで嬉し涙を隠せない。これからの時間の方が長い事は嫌という程知っているから、今だけは。笑わせてほしい。喜ばせてほしい。明日からの戦いのために。現実との戦いを勝ち抜くために。これくらいのががまは許して。 [#twnovel](#)

ほら鬼が悔しがっているよ。心にそびえ立つ希望の城は壊せなかったと音をあげている。僕らの笑顔と勇気の声に怖気づいて逃げ出していく。心で泣きながら自然に振舞おうとする、その震える生命だけが与える光の雫は自らだけでなく誰かの心も蘇生させる。それだけの力を君は持っている。 [#twnovel](#)

希望を選ぶ事に慣れているだろ？どんな複雑な枝別れの選択だっていつでも自然と希望の方を向いてきた。なんでこんなにも当たり前の事を日本中に教えちゃいないんだ。え？何の事だって？大きな苦難は大きな幸福の前触れだってことさ。暗黙の了解だろ？嫌な事の後にはいい事がお決まりさ。 [#twnovel](#)

涙さえも流れない悲しみ。それでもいつも君の心の中に生きている。記憶の中にじゃない。ちゃんと君の生命の中にいるんだ。何十年経っても祈りを忘れない。本当だ。嘘だと思われてもかまわない。たくさんの人生を背負って生きていく。僕も君と二人一生背負い続けよう。言葉はいらない。[#twnovel](#)

大地は今何を思う。2つの声が聞こえるというなら、僕らは大地の「味方だ」という言葉信じ切ることができる。今まで気がつかなかただけ。いつも僕らを支え続けてくれたこと。永遠という言葉が希望に聞こえる日までチューニングをそこに合わせる。生きる事で全てを価値に変えていく。 [#twnovel](#)

起きる時間まであと5時間。少し眠ったかどうかというところ。喉の渴きを覚えて深夜キッチンでコップに水を注いでいた。飲み干した帰りに君とすれ違う。縦縞の線が入ったパジャマ姿の君はさっきの僕と同じ行動を辿るように水を注いで飲み干した。僕ら知らないうちに似てきてるのかな。 [#twnovel](#)

虹色の景色が遠のく。所詮過去の記憶だ。増えも減りもしない。明日という香辛料に僅かな望みを託して今日も眠りにつき今日も目覚める。だがそれをただの繰り返しだとは思わない。思えない。火照るという感覚を忘れて久しい現在を迎えてもいつかそれを越える感覚に出会える事を信じて。 [#twnovel](#)

桜の花か。心の中でそう呟く。はっきり言って季節にあまりに無頓着になりすぎた僕は、今どんな季節なのかさえ気がつく事はなかった。でもこの桜の囁きが春に気づかせてくれた。積み重なった緊迫が心の中で打ち崩れていく。気が抜けたみたいだ。誰か必要としてくれる日がくる気がした。 [#twnovel](#)

ピアスを外して何年になる？あの時買い溜めたピアスもただ散らばるばかりで。使わないままそれきりだ。あれから何が変わったわけでもないのに、まるで全てが変わったように天気の良い日は歩きたくなる。走って息をあげるなんて何年も忘れていた感覚。たくさんの事を思い出しこらえた。 [#twnovel](#)

生命が傷ついたり涙を流したりするほどに宝を蓄えているという事を君は信じられるのだろうか。そんな問いさえもなく信じ切るあの心は眩しすぎて。どんな暗闇に閉ざされた日々でも頭の片隅にその光が常にあった。その時人は気づける。"忘れないこと"。それだけが力になる事もあると。
。 [#twnovel](#)

おっと。思わず手を滑らせて大切なイヤリングを落とすところだった。一つの事をしながら他の事を考える癖がある。私の悪い癖だ。でも窓の外の景色は気のせいじゃなかった。雪がピンク色に見えただけかもしれない。夕日に照らされた雪の幻想かもしれない。それでも。心に春が来た。 [#twnovel](#)

闇が光を嘲るのなら光もまた闇を嘲る。その程度のものかと。人情の熾烈な戦いは言葉にする事も出来ない。しかしこれだけは言える。最後は光が勝つ。その結論を嘲る声も今だって聞こえる。でもそれがなんだというのだろう。無力な者の声は何の意味もない。行く手を阻む事などできない。 [#twnovel](#)

聞きたくないよと耳をふさぎたくなる夜。夜と朝の境に見える紫。今日もこの景色を迎えてしまったかと少し落ち込んだ。でも確かにこの心に届く文字もある。傷つけることなど知らない光そのもののようなそれは僅かだけれど。その僅かが全て。傷つくたびに戻ってくる。僕だけの戻る場所。 [#twnovel](#)

体ごと飲み込まれてしまいそうなほど高い空。その水色に自分が溶けていく感覚を覚えた。今度は僕から空を抱きしめてみる。考えていたよりもちゃんと空を抱きしめる事ができているような気がしたのは気のせいなんかじゃない。僕らは僕らが考えているよりもずっと大きい存在なんだろう。 [#twnovel](#)

潤んだ瞳が今も心に焼きついている。君は決して泣く事はなかった。ただ何かをこらえている事は確かだった。拭えぬ悲しみをこらえている事は確かだった。呻き声一つ上げないその姿は慟哭している姿よりも悲しみに満ちていた。そして何かを決心したように上げた顔には涙一つなかった。 [#twnovel](#)

急激な温度の変化と迫りくる寒気の流れ。最近の恒例にさえなっていて、いつも僕は振り回されっぱなし。だけど寒空の下不意に雲間から差す暖かな日差しに冬を憎む気も全く失せてしまう。気候も人間関係もちょっと憎めない所はどこか似ているような気がしていた。走ろう、今日も。 [#twnovel](#)

枝さえも凍ってしまうような寒さだ。手袋をしていても素肌に直接刺さるように冷えがすり抜けてくる。見えない虚栄もこの寒さに凍れば、見えるようになるものだろうか。水蒸気さえも凍りつく、人の見えそうで見えない良い部分も悪い部分も凍りつき俯いてしまうような、寒い夜だった。 [#twnovel](#)

朝起きてカーテンを開けると溺れてしまいそうな光が部屋に差し込んでくる。片目を瞑り手で光を遮る。夜になるとこの溢れんばかりの光もなくなりただ黒が広がるばかり。それだっていうのにどんなに黒が広がっても朝になると変わらず光は溢れてくれる。なんてないことが不思議だと思う。 [#twnovel](#)

普段さりげなく施すネイルもとおきの日には趣きが違ってくる。見た目は同じ。少しいつもより煌びやかなだけ。違うのは施す時の言霊を託す時のような集中。一はけ塗るごとに思いを重ねるようにじっくりと。それは誓いにも似た思いだ。たかがオシャレ。でもされどオシャレなのだ。 [#twnovel](#)

小腹が空いたので湯を沸かしカップ麺に入れてじっと睨む。いや、睨んでいるわけではないのだが、つい待っている間見つめてしまうのだ、いつも。この3分間をたかがカップ麺に束縛されているようで悔しい気もするが、砂時計を隣に置いて全て落ちるのを待つこの時間が実は嫌いじゃない。 [#twnovel](#)

外から帰ってきた途端、ファンヒーターの前に一直線。寒い寒いと震えながら今度はこたつにもぐり込みミカンを頬張る。なんてことはない冬の日常。だけどその何気ない一瞬一瞬がとてつもなく大切なものを感じた。これは当たり前なんかじゃない。当たり前なんかじゃないんだ

。 [#twnovel](#)

泣かないでよとの声が遠く聞こえた。なぜなら涙をこらえるのに必死で余裕がなかったから。君はそっとココアをテーブルに置きその場を立ち去る。本物の優しさ。それが何かは分からないけれど僕の目の前に置かれたそれは僕にとって確かに優しさだった。優しさは目に見えるよ。心で
呟く。 [#twnovel](#)

太古の昔、荒れた王の痕跡は今もうあとかたもなくなっている。城はあの孤独の痛みを残す事なく、あの日の心象を映すように存在するだけだ。時の流れとはこうも無情なものなのだろうか。確かな事は人の心はいつまでも残るという事。それが痛みだとしても温もりだとしても、だ。
。 [#twnovel](#)

星があまりに綺麗だったから並木道をいつもよりも長く散策していたらコンビニで買った肉まんもすっかり冷えてしまった。夜になって冷えるから当たり前といえば当たり前か。そんな事も気にしなくなるほど夜道の散歩に久しぶりに熱中していた。不意に見つけた流れ星は君からの手紙かな。 [#twnovel](#)

休みに入り少し豪華なランチに行こうと出かける。この人の多さだ。予約は済ませた。昼間だということもあるが僕はいつも食事を水だけで済ませる。我慢しているんじゃない。お酒は苦手なんだ。そんな僕を君は草食系だとからかう。なんだよ、と言いながら恋してるんだ。知っているだろ？ [#twnovel](#)

遊びに来た遊園地で君とはぐれてしまった。夜も深い。そんな時のために僕らは約束していた。はぐれた時はあの時計台で待ち合わせしよう、と。その場所に行くとやっぱり君はいた。その瞬間、時計の針が0時を差す。シンデレラなら魔法が解ける時間。だけど僕らの魔法はここから始まる。 [#twnovel](#)

二人で出かけるため玄関へ向かう。君が靴を履いていると、いきなり何かを見つけ床にひっぱたいた。なにかいたの？と聞くとどうやら季節外れの蚊がいたらしい。手の平には見事に奴がいた。手を洗ってくるねとまた戻り、そうこうしているうちにいい時間だ。そういうとこ嫌いじゃない。 [#twnovel](#)

さよならと口唇だけで言った帰りの路地裏で、君は何を思ったのだろうか。そう思いを巡らしても僕のサヨナラが消える訳じゃない。消える訳じゃない、なのに。何度も君の心を想像してはかき消している。オレンジ色の町に雪が舞う。その様子がとても綺麗過ぎて、雪にならない涙が流れた。 [#twnovel](#)

まだ人の気配のない早朝から書庫に用があった僕はお目当ての文献を一通り漁り終わると外に雨が降っている事に気がついた。強い雨を呆然と見上げていると横から赤い傘が差し込まれた。驚いてその方向を見ると憧れの人姿。私は書庫に用があるからとそのまま傘を手渡し行ってしまった。 [#twnovel](#)

比較的待ち時間が長時間に感じる昼のエレベーターを一人待つ。ほとんど全ての人が昼休みを終えているのだから無理はない。かといって階段を使う気にもなれなかった僕だったが、不意に誰かからの視線を感じた。ああ、分かってる。君だという事は。誰も気づいていない。僕らの関係。
。 [#twnovel](#)

何かから逃げるかのように僕は料理に熱中していた。君から届いた手紙の内容を忘れるために。何が書いてあったかは僕だけが知っているだけで充分だろう。意味があろうがなかろうがそんな事はかまわない。こうでもしなけりゃやってられない。涙さえ流れない時は何かに没頭したい。 [#twnovel](#)

出張先のホテルで一人朝を迎えた。眠る時には外していた眼鏡をして携帯を見る。君からのおはようメール。もう孤独を貪っていた頃の僕はここにはいない。小さなことでも人間は幸せを感じられると君に出会って初めて知ったよ。ここにいるのは確かに僕一人だけれど、一人じゃなかった。[#twnovel](#)

雨の屋上で黙って傘を差しだされるだけで優しさが伝わってくるようだった。君の赤い傘が僕の記憶に鮮明に残る。愛の形は別に一つじゃなくてもいい。僕がそう感じればそれは間違いなく心の中で宝物になるだろう。一人泣きに来た屋上で僕の心の中に光差した。僕は涙を隠し顔をそむけた。 [#twnovel](#)

映画を見ながら涙する君を僕は隣から気づかれないように見ていた。そんなに泣きじゃくらなくてもいいのに。でもそんな所がとてつもなく愛おしい。ハンカチだけではこらえきれずに長袖の袖を使って感動をこらえる君は現代にとって貴重な存在だろう。そして、僕にとってもオンライン。 [#twnovel](#)

立ち上る湯気の中で一人考えた。君とこうして温泉旅行に来ている事の不思議を。恋をしすぎて
いるせいでそれだけで涙流してしまいそうだ。この湯気の中じゃ誰も僕が泣いている事なんて気
づかないだろうからいっそ泣いてしまおうか。他の色々の感情も込めて。いっそ泣いてしまお
うか。 [#twnovel](#)

朝のエレベーターの中で偶然君と出くわす。それだけの事なのに二人きりの空間というだけで心くすぐられる僕がいた。高鳴る鼓動。ふと今朝の星座占いの結果を思い出す。...最下位だった。そう、占いなんて当てにならない。この後その結果をものともせず声をかけたから今の僕らがある。 [#twnovel](#)

久しぶりの温泉旅行。久しぶりの畳の部屋。ふとんで眠るのも久しぶりで。いつもベットだからとはしゃぐ僕にぐっと近づき君がこちらを見つめていた。10cm。僕と君の距離。こんな事できめいてしまうなんて。非現実的な空間という魔法は君をこんなに大胆にする。そして僕の事も。 [#twnovel](#)

僕が時間を気にしているそぶりを見せると、君は時計なんてみないでと悲しそうな顔をする。だからその声の思うがまま、僕は君と過ごすこの瞬間だけを見つめていた。好きにされたい。その気分は一步間違えれば危ない橋。あの頃の僕はまだ未熟で。何一つ見えてはいなかったのさ。何一つ。 [#twnovel](#)

昼間に君がお見舞いに来てくれた時にくれた飴玉。後で食べるねと言っておきながら引き出しに入れておいたまま忘れていた。深夜となった今その君の優しさのかたまりのような飴玉を誰にも気づかれることなくほおぼる。自然と笑みがこぼれた。早く君の元に飛んでいきたいと心から思った。 [#twnovel](#)

毎朝君のために朝ご飯を作る僕。でも最近芯から寒さが染みてきて。暖房を入れても台所は底冷えが酷かった。ブルブル震えながら卵を割っていると君が急に背後からマフラーを僕の首に巻き付けた。一見、身の危険さえ感じる行為。寒そうだからとそつなく返す君に返す言葉は...ありがとう。 [#twnovel](#)

夕暮れ時にテレビを見ていると、君もこたつに潜り込んできた。冬になると昔こたつに猫が隠れていた事を思い出す。暑くて慌てて出てくるんだ。君が何考えてるのと聞いたから説明してもふーんの一言で済まされて。でもこうしているとどんなに愛を囁くよりも愛し合っていると思うんだ。 [#twnovel](#)

裏切ったな、とあからさまに言えたならどれだけ楽だっただろう。それじゃあまるで畜生だと、いな犬にも劣る行動だとあの夜屋上で声を荒げる事ができたならどれだけ楽だっただろう。あの日僕は静かに身を引いた。傷つきたくなくて。真実は何もしなくても君に突きつけられるものだから。 [#twnovel](#)

朝起きて手を手を繋ぐと君の手は氷のように冷たくて。ハッとさせられた僕は君の目覚めに安心する。冬の朝はいつもそうだったっけ。一年経つとおぼろげになる。この季節がやってきたのかと冬の訪れを実感した。手を握ったまま暖まるまで離さない。冷たい手を暖めるのが恒例の僕の仕事。 [#twnovel](#)

僕が歩きながら高架下に差しかかると後ろから足音と息遣いが聞こえてきた。振り返る前からすぐに分かったよ。追いかけてきたのは君だって。早朝で危ない場所だっていうのに君は僕の忘れた本をただ渡すためにそれだけを思って走ってきてくれた。その真っ直ぐな気持ちごと君を抱きしめた[#twnovel](#)

最後の一つだよと僕に告げて淡々と君は一人みかんを剥き始めた。がっかりしている僕にはい、とみかんを差し出してくれた。君の嘘に騙された僕。食べられないつもりでいたから、いつものみかんも余計おいしく感じられて。テレビに映る花束を見つめる君にいつか本物をあげたいと思う。[#twnovel](#)

いつもの水族館で休日に待ち合わせをする。ここで寄り添っているだけで僕らは幸せを感じていた。ゆらりと輝く水面がやけに眩しい。ここで二人で過ごす時間はどんな花束よりも美しく思う。楽しい時間はあっという間に経つ。なごりを惜しみながらバイバイと手を振る君の背中を見送った。 [#twnovel](#)

雷が落ちたのだろうか。深夜に起きて電気をつけようとしても明かりがつく事はなかった。とりあえずソファに座って暗闇を一人抱きしめていると持ちだした携帯の液晶が明々と光る。君からの着信だった。明かりを失うと人は寂しくなるもの。だけど君の声を聞くと大丈夫だよと僕は強がる。 [#twnovel](#)

まだ寝ぼせていたせいで朝ご飯を作るためのキッチンでもの思いに耽っていると急に君がわっと僕を驚かせた。すっかり驚かされてしまった僕だったがそこに不思議と怒りはない。君の笑顔を見たたんそんなものはどこか遠くに吹き飛んでしまっ。そんな魔法を君は持っているんだろ
うね。 [#twnovel](#)

読みたい本があるの。そう言われるがままに僕は今日暮れの図書館にいる。図書館だなんて何年振りだろうか。もう随分と縁遠い場所になってしまった。こんな事がないと来る事もなかっただろう。あつた、と心で呟き手に取る。本を開けた瞬間に自分が眼鏡必須になった理由を思い出した。 [#twnovel](#)

夏の名残りがまだ君の肌を焼いたまま日焼けの跡をつくるから、僕は夏の太陽に嫉妬する。冬の始まりからは、僕が君のそのひんやりとした白い手を掴んで離さないから。君に温もりという跡をつけるのは今度は僕の番さ。冬は太陽に君を渡したりしないから。太陽に嫉妬する僕を君は笑った。 [#twnovel](#)

昼休みに公園ですれ違った子供達に急にノスタルジーを覚えた。特に子供時代が好きだった訳でもない。ただこうして遊んだ時代も僕にあったのかと思うと悪くないなと思う。こう思えるようになったのも君に出会って心の余裕ができたからだろう。最近かけ始めた眼鏡越しに彼らを見つめた。 [#twnovel](#)

君の笑顔を予想したからサンセットの海辺であえて君の方向を見つめないでいた。チョコレートが大好きな君はいつもあどけなくていつも微笑んでくれる。君の方を見なくても分かるよ。その優しさが僕を包んでくれているという事。確認なんていらんだ。その温かな眼差しさえあれば。 [#twnovel](#)

眠れずに真夜中起き出しリビングで泣き出した僕はパジャマのままソファに座り虚空をぼんやり見つめた。涙が次から次へと溢れてくる。止める理由などどこにも見つからないまま時間が過ぎていく。すると横から冷えた麦茶の入ったコップが差し込まれる。君だ。それは言葉以上の温もりで。 [#twnovel](#)

罨だと知りながら嵌りそうになるのは人の性というものなのだろうか。僕はそれに抗いたくて君から遠のいていった。それでもあの日のときめきは嘘では決してなかったのだけれど。あの日、夜の海辺で君にさよならを告げた僕は、間違いなく君ではない君より大切なものを選んだのさ。

[#twnovel](#)

夜の歩道橋で迎えた別れ際、僕は君と離れるのが寂しくて寂しくて急に怖くなった。笑顔で手を振っていたがその手は震えていて。君と過ごす時間が蜂蜜のように甘すぎたせいで僕はその味が忘れられなくなっていた。君の背中が遠ざかった時不意に君が振り向いてもう一度手を振る姿が眩い。 [#twnovel](#)

空腹を感じた真夜中。日が落ち切って陽の光も当たらないはずのこの場所でもやはり暑さを感じていた。でも君はそんな中でも隣で楽しそうにしている。だから何もかもどうでもよくて。君が笑っていれば僕は何もいらなのだから。何の変哲もないハンバーガーもおいしく感じたんだ。
。 [#twnovel](#)

暗闇の中をふわふわと浮かぶような気分でひとりぼっちの人形が彷徨っている。彼は世界からとうの昔に忘れ去られており感情さえも忘れ去ってしまっているようだ。見るものをも悲しい気分にしてしまうからと世界から距離を置いたらしい。その優しさがあのか細い体に今も刻まれている [#twnovel](#)

君に誘われて朝のベランダに降りると君が指差す方に猫がいた。大きなあくびをするその猫は、こちらの方を知ってか知らずかこちらを見上げた。目が合って何かハッとさせられる。それは君も同じだったようでクスクスと笑った。君が笑うからこっちまで笑顔にさせられるんだよ。心で思う。 [#twnovel](#)

久しぶりに外で朝食を摂ろうと思い立ち近所のカフェに入る。こうして窓側の席に座り時々一人きりの時間を楽しめば都会に溺れずに済む。こうして携帯の電源を切り距離を保つのもいい。今君は何をしているんだろう。外で何かを啄む鳥を見ながら食事にも手をつけずそんな事を考えていた。 [#twnovel](#)

記憶を振り返ってはあの日見つめた空にキスし傷跡を辿るのをもうやめたい。そんな事をぼんやり夕方のベットの上で思う。ただ、最近見つめる景色には雨模様の空でもとなりに君がいる。あの日の空に恋する日々はもう長くはないだろう。もっと大切なものを見つけたから。君という太陽を。 [#twnovel](#)

夜の屋上で君が語る姿は、まるで水を得た魚だという例えがぴったりだった。日常で感じた悲しい思いも苦しい思いも隠しながら、ただひたすらに悲しみに追いつかれないように君は話し続ける。僕はただ頷いて聞いていた。それなのに、君はふと悲しい顔をして。僕はその瞬間、恋に落ちた。 [#twnovel](#)

遊園地でハンバーガー。よくある流れだという思考は君の笑顔で吹き飛ぶ。座っていると君がドリンクは何がいいの？と僕に聞く。焦ったせいでコーラを選ぶ。いつもは飲まないのにそれしか思い浮かばなかった。そして君はまた買い出しに戻る。一人きりで待つ時間がやけに長く感じられた。 [#twnovel](#)

夜の屋上で君と星空を眺めていた。夏の季節には丁度花火が見えるそんな屋上。秋の今は自販機で買ったペットボトルを空けながら他愛もない話を重ねる。時々照れ隠しにペットボトルのお茶をぐい、と飲んで紛らわしていた。でも結構楽しかったりするんだ。君の横顔を一人占めできるから。 [#twnovel](#)

コンビニ前の駐車場で自分の車に乗り込んだ後買ったてのおにぎりを食べようとする。かじろうと思った瞬間携帯のメール着信音が鳴る。もう少しで朝ご飯にありつけたのにといいながらメールを確認する。君からだった。苛立ちも忘れて貪るように読んだ。僕はこうして君からの愛情を貪る。 [#twnovel](#)

傘を忘れた僕らは非常階段を降りたところで足止めを食らった。雨だ。深夜の空から秋雨が注ぎ二人の行く手を阻んでいる。困ったね、と君の方を振り向くと不意に噛みつくように君は僕に口づけた。雷が遠くから轟いている音は僕の心の高鳴りを表現するように何度も雷光を繰り返していた。 [#twnovel](#)

いつだったか君と深夜のグラウンドに忍びこんだ事があったね。今になってあの時の事を思い出していた。あの時君がくれた飴玉の味が時々恋しくなる。本当によくある飴玉。でも自分で買って食べてみてもなぜか同じ味がなくて。そして気づく。君がくれたから甘く感じたんだという事に。 [#twnovel](#)

一人で過ごすひだまりの部屋。一人で過ごす秋雨の音が聞こえる部屋。この部屋がどんな部屋に変わっても君との心のすれ違いに心痛めていた。あの頃の僕か今の僕か時々分からなくなる。でも過去として消化できたかはどうでもいい。僕は君を愛した。その事実だけ抱いて今を生きるだけさ。 [#twnovel](#)

朝日を見たのはいつ以来だろうか。そんな事を思うほど朝日を眺めたのは久しぶりだった。まだベッドで寝ている君を起こさないようにカーテンの隙間から眩しい光を浴びる。君の隣に戻った後、白い腕がこぼれていたからそっと手を繋いだ。そんな一瞬がとんでもない魔法に感じたのは秘密。 [#twnovel](#)

旅先で急に君がふてくされた。僕が気の触る事でもしたのかと焦る。でもどうやら違うよう。話を聞いてみると今まで地元では見た事のない鳥の飛び立つ姿があまりに自由そうで嫉妬したのだという。夕日が沈む。そっと君の肩を抱き大人しくなる単純さと嫉妬する複雑さ。どちらの君も好き。 [#twnovel](#)

朝靄の並木道を無性に歩きたくなって朝早くからひとり落ち葉のこすれた音を響かせる。目的もなく今はただ歩きたかった。膝から崩れ落ちそうになる心を必死に押さえながら歩く僕を狙って雨が頬を濡らしてく。今なら泣いても誰も僕を責めはしないだろうか。雨は泣くばかりの僕を許すかな[#twnovel](#)

憩いの場となる昼の公園でベンチに座り一息つく。そうすればいやなことを少し忘れてしまえるよと教えてくれたのは君だったね。子供たちの足音も遠く微かに聞こえるほど僕はこの空を君に繋げていたんだ。すでに君から教わったこの習慣も僕のもの。そんなことを缶コーヒーを片手に思う。 [#twnovel](#)

大人になった僕達が久しぶりにグラウンドという場所に足を踏み入れたのはちょっとしたきっかけがあったから。眺める夕日は秋色をされていて水を撒いたりしていたあの日を追憶するのに丁度いい。君から珍しく手を繋いできて、僕は妙に自分の鼓動を大きく感じた。繋いだ指から伝わるかな。 [#twnovel](#)

眠れないからと言って君は深夜の遊歩道に僕を連れ出す。それが言い訳だという事は明確でも僕は何も言わず言われるまま家を飛び出した。二人して遊歩道にあったベンチに座り込み突然君が嘸みつく様な怒りを露わにする。昼間僕が罵倒されたから。雷のような感情を抱えてくれてたんだね。 [#twnovel](#)

傾く日の光が閑散とした廊下を差す。僕の選んだ道は何でもない事を特別なことと感じる道。この廊下をもう二度とは通らない道。君が教えてくれたんだ。魔法はかけられるものじゃなくてかけるものなんだって。だから僕は僕に魔法をかける。今は孤独でも一人じゃないと感じられる魔法を。 [#twnovel](#)

一人泣く夕方のソファの上、膝を抱えて君が帰るのを待つ。泣いた事に意味はなくて。無性に君に会いたかった。毎日帰ってくるはずの君なのに家を出てから帰ってくるまでの時間がこんなにも長く感じる。僕の姿を見つけた君はすぐさま僕の頭を撫でた。その手が僕にとってのとても尊い冠。 [#twnovel](#)

人の気配のない朝の駅。君は静かに缶コーヒーをくれたね。僕に別れを告げて欲しいの？その答えは分からないままでも列車に乗り込む君の横顔が孤独を色濃く映していた事は確かだ。だから君の望み通りさよならと叫んだ。まだいつかの希望を断ち切れないまま声の限りさよならと叫んだ。 [#twnovel](#)

夜の映画館に二人で入る。モノクロの画面に映る落ち葉。映画の中の物語の季節は秋なのだろうか。分からない。心がそぞろなのは隣に君がいるから。本当は君を見ていたのに無情にも物語は進んでしまうから。君を見つめる代わりに画面を見つめていた。もどかしく心で君を見ていた。 [#twnovel](#)

コーヒーの香り。君の手元にある水筒から香ってくる。少し肌寒い早朝の海辺で静かな時を過ごす僕ら。手渡されたそれはとても温かで。僕の心にまで温もりが届いてくるようだった。その時僕は小さな嘘をつく。本当はこんなにも些細なことが泣きたいほど嬉しいのに無表情という嘘をつく。 [#twnovel](#)

昼の病院で、ひとりきりで順番を待っていた。その流れる時間が自分自身をうきぼりにする。疑うべきなんだ。今ここにいなくちゃいけない事を。外に出ると鳥が飛んでいた。そこは今まで見ていない世界だった。 [#twnovel](#)

休日だという事は分かっていた。時計を見ると昼12時ちょうど。昼の教室に立っている僕を、あの午後独特の光が包み込む。机の上に置かれた花瓶の花。一気に記憶が蘇り、これは君のくれた再会だと悟った。はっと目が覚める。僕にとって今は夢でも、あの頃夢じゃなかった

。 [#twnovel](#)

早朝の海辺にまだ寝ぼけ眼のまま辿り着く。揺らぐ水面がかき消すのは、あの頃まだあったはずの砂に書いた文字。やけに最近思い出すんだ。「手品みたいだろ」って消えゆく文字を見て無邪気に笑った君の笑顔を。 [#twnovel](#)

あれからここまでどうやって歩いてきたのか覚えていない。本物の衝撃を受けると人は本当に記憶をなくすものなんだなと他人事のように思った。どうやってここまで来た？なんて野暮な質問はやめてよ。人生にあらがっていた。ただそれだけの事。 [#twnvday](#) [#twnovel](#)

君にもらったペンダント。これを身につけるだけで強くなれる気がする。君が夏にくれたガラスのコップ。きらきらと見つめているだけで希望を持てる。希望だなんて言葉にすると大げさに聞こえてしまうね。だけど明日も生きてみようかと思えるためのそれは些細な場所に存在している。 [#twnovel](#)

100

100

あれからどれだけの忘却が生まれたのだろう。誰にも言わないけれど僕は覚えている。今も。混沌の中で名も知らぬ誰かが言っていた。10年後も今の気持ちを忘れなければ助ける力になれるんだ、と。何もできなくていい。忘れさえしなければ。それがヒーローを生む。 [#twnovel](#)
[#twnvday](#)

140Words twonovel ～LOVE&HOPE～

<http://p.booklog.jp/book/27974>

著者：瑠冠

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/ruka001/profile>

発行所：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/27974>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/27974>